

演題番号

「楽しさ」を重視した、 中学校技術・家庭科（家庭分野）用食育プログラムの開発

○^{やり た たまみ} 鎗田 珠実(さいたま市立内谷中学校), ^{えとう くみ} 衛藤 久美(女子栄養大学)
^{なかにし あけみ} 中西 明美(女子栄養大学大学院博士後期課程), ^{かわしま あい} 川嶋 愛(女子栄養大学栄養科学研究所)
^{たけみ} 武見 ゆかり(女子栄養大学・大学院)

【背景】近年、子どもたちの食生活の乱れや問題が多様化、複雑化しており、学校では平成17年の食育基本法施行を機に、食育推進体制を整備し、今まで以上に教育活動全体で指導の充実に努めている。家庭科の学習は学校における食育推進において大きな位置を占めるが、国立教育政策研究所の調査（平成19年）によると、調理実習が好きだと答えた生徒9割に対し、栄養や食品、献立作成の学習が好きだと答えた生徒、家庭実践の意欲がある生徒は約半数と課題がみられた。そこで、児童生徒の学習意欲を高め、日常生活での実践意欲につなげられる食育プログラムとは何か、どのように指導すると効果が高まるのかなどを検討する必要があると考えた。

【目的】小学校家庭科の指導内容との体系化を意識した、『明日の元気な自分のために、食生活に高い関心を持ち、食（栄養）の学習を大切に思う生徒』を実現するための中学校技術・家庭科用食育プログラムを開発し、その有用性を評価する。

【方法】2011年10月～11月、埼玉県S市立W中学校1学年4クラス136名（男子60名、女子76名）を対象に、全3回のプログラム（後述する①～③）を実施した。プログラムは「楽しさ」を柱とし、小学校の学習とのつながりを生徒たち自身が意識できるよう、S市全小学校の食育プログラムで学習している「食事バランスガイド」及びその「マスコットキャラクター」を用いることとした。プログラム①：五大栄養素に関する〇×クイズ、6つの基礎食品群の学習を定着させるためのカードゲーム。プログラム②：「何を」「どれだけ」食べたらよいかの基準を満たすには、どう食べれば良いのかを、実物食材や料理カードを使って班員と相談し

ながら考える活動。プログラム③：①・②の復習として『元気モリ・モリ！すごろく』、①・②の学習を踏まえた『元気な自分を目指して』というテーマの1日の献立作成、考えた朝食か夕食のどちらかを家庭で実際に作る家庭実践。

以上のプログラム前後の変化を評価するために、全3回の学習の前と後に0～10点のVAS（視覚的評価スケール: Visual Analog Scale）を用いた質問紙調査を、プログラム内容を評価するために、各プログラム終了後に3又は5件法のフェイススケールを用いた質問紙調査を行った。学習前後の差の検定には Wilcoxon の符号付順位検定を、男女差の検定には Mann-Whitney のU検定を用いた。また、授業者及び授業参観者に、感想やプログラム内容についての意見を自由記述で求めた。

【結果】学習前後の変化では、1) 栄養や食品の学習が好きか(中央値: 事前6.0vs 事後8.0)、2) 1)の学習を大切だと思うか(9.0vs10.0)、3) 献立を考える学習が好きか(7.0vs8.0)、4) 3)の学習を大切だと思うか(8.0vs10.0)、5) 健康を考え、食事のとり方に気をつけているか(7.0vs8.0) [全て $p<0.001$] と、全ての項目で有意な改善がみられた。学習前後とも有意な男女差は見られなかった。また、各プログラム終了後の評価では、全3回とも「授業が楽しかった」と答えた生徒が8～9割と多く、同時に新たな知識や技術の習得、学習内容のおもしろさの実感も得られていた。以上から、本プログラムは目指す生徒像実現に有用と示唆された。

【ラウンドテーブルでの検討課題】

- (1) 本プログラムの内容や教材に対する意見
- (2) 本プログラムの一般化に向けての改善策

E-mail ; ytl111@eiyo.ac.jp